

ウィズコロナ・ポストコロナにおける初年次教育 —全学共通初年次教育科目「まなぶる>ときわびと」について—

光成研一郎¹・伴仲謙欣²・高松邦彦³・中田康夫⁴

First-Year Experience of With Corona/Post Corona: Focusing on “Academic Skills and Deep Learning”

Kenichiro MITSUNARI・Kenya BANNAKA・
Kunihiko TAKAMATSU・Yasuo NAKATA

神戸常盤大学は、保健科学部と教育学部2学部5学科からなる専門職養成に特化した大学である。本学は、全学共通初年次教育科目として、1年次の前期に「まなぶる>ときわびとⅠ」(60時間、以下「Ⅰ」と後期に「まなぶる>ときわびとⅡ」(30時間、以下「Ⅱ」)をシリーズで開講している。本科目は、学部・学科(5学科)を超えた混成チームによる協働型学修法を採用し、運営についても、学科の枠を超えた教員(少数の職員)が協働で行う。約30名の教職員がペアとなり、5学科約400名の学生を担当する。授業デザインは、「開講直後からの十分な時間をかけたチームビルディング」「各授業単元(テーマ)」「ふり振り返り・分かち合い」「事前事後学修」などで構成される。これにより、授業内容の定着と、「チーム医療」「チーム学校」の実践者養成を目指す観点からチームビルディングの促進を目指している。「Ⅰ」では、協働学修によるコミュニケーション力の向上と、大学生としてのリテラシーの核となる論理性を重視し、「ロジカルコミュニケーション」を主要テーマに据えている。ロジカルに思考するためには、情報を正しく受け入れ、自らの考えを説得性(根拠)をもって、共有・発信する力が求められるからである。続く「Ⅱ」においては、それぞれの(大学生としての)学びのスタイルの確立のために、数理的教材の活用による「計画的学修」と「学生相互による教え合い」を主要テーマとする。これは、「Ⅰ」で学んだ内容の実践場に位置づけられる。上記の授業内容について、2020年度からはコロナ禍により従来の対面授業に加え、一部のコンテンツをオンデマンドの遠隔授業にせざるを得なかったが、それでもなお大学共通の授業評価は上昇し、なおかつ科目独自の授業評価もコロナ前に比べてよい結果が示された。本稿では、本学におけるブレンド型初年次教育の授業内容と本科目に対する授業評価の結果を示しつつ、ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育のありかたについて報告する。

〔キーワード：チームビルディング，ふり振り返りと分かち合い，ロジカルコミュニケーション，計画的学修，学生相互による教え合い〕

¹ 神戸常盤大学教育学部 kmitsunari@kobe-tokiwa.ac.jp

² 神戸常盤大学短期大学部 k-bannaka@kobe-tokiwa.ac.jp

³ 前 神戸常盤大学保健科学部／現 東京工業大学企画本部 ktakamatu@gmail.com

⁴ 神戸常盤大学保健科学部 y-nakata@kobe-tokiwa.ac.jp

1. はじめに

神戸常盤大学において、全学共通初年次教育科目として「まなぶる➤ときわびと」を開講し、全学に開かれた初年次教育を本格実施させたのは2017(平成29)年度である。それまでも本学では初年次教育を実施していたが、医療検査学科、看護学科、こども教育学科、口腔保健学科という専門性の高い4学科(2020年より診療放射線学科が開設され現在は5学科)から成る本学においては、専門職業人育成という観点から、初年次教育科目を含め専門科目と基礎科目のすべての授業が、各学科で別々に行われる状況にあった(桐村・光成・國崎・牛頭・高松・伴仲・中田, 2018a)。しかし、本学における第1次教学マネジメント改革について検討する中で、本学の学科がいずれも「チーム」がキーワードとなる対人援助職を養成しているという観点も踏まえ、これまで各学科別に行われていた基礎科目などを全学科共通の基盤教育として見直したうえで、基盤教育の「背骨」に位置づく学びの始め科目群の科目として、「まなぶる➤ときわびと」を設定することとなった(桐村・高松・伴仲・野田・光成・中田, 2018b)。

2019年12月に世界で初めて報告された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、全世界の高等教育にも甚大な影響を及ぼした。わが国においても2020年度春学期は、大学等の96.6%がオンライン授業を実施した(文部科学省, 2020)。本学においても、2020年度の授業開始日は本来4月10日(金)であったが、種々の状況を鑑み、4月20日より、準備の整った科目から随時オンデマンド型の遠隔授業を開始した(大森・溝越・高松・野田・伴仲・中田, 2021)。本科目も例外にもれず、2020年度からはコロナ禍により従来の対面授業に加え、一部のコンテンツをオンデマンドの遠隔授業にせざるを得なかった(高松・野田・溝越・伴仲・中田・大森, 2021)。

本稿では、本学におけるブレンド型初年次教育の授業内容と本科目に対する授業評価の結果を示しつつ、ウィズコロナ・ポストコロナにおける初年次教育のありかたについて報告する。

2. 全学共通初年次教育科目「まなぶる➤ときわびと」

(1)「まなぶる➤ときわびと」のねらい

「まなぶる」とは、「まなぶ」と「able」の造語で、「ときわびと」は教育現場や医療現場でいきいきと活躍している本学の卒業生の総称である。ゆえに学生が、対人援助職として、生涯にわたって、主体的に学び、現場でいきいきと活躍できる「ときわびと」になることを願って、命名した。前期に「まなぶる➤ときわびとⅠ」(2単位60時間30コマ, 以下「Ⅰ」)、後期に「まなぶる➤ときわびとⅡ」(1単位30時間15コマ, 以下「Ⅱ」)を全学必修初年次教育科目として実施している。

本科目はそもそもある特定のスキルを涵養するというよりはむしろ、「鉄は熱いうちに打て!」ではないが、それぞれの学科の専門性を身につける前のこの時期に、各学科に共通して必要なチームワーク、コミュニケーション力、課題解決能力といったジェネリックスキルの大切さを学生に体験的に学んでもらうことを意図している(光成・桐村・國崎・牛頭・高松・伴仲・中田, 2018)。

この科目のねらいは、全学生が対人援助職を目指すことから、仲間と協働できる人材養成を目的としており、2学部(教育学部・保健科学部)、5学科(こども教育・医療検査・診

【協働力】：多職種連携を目指すコミュニケーション力

【ロジカルコミュニケーション】：論理的なリテラシー

【計画的学修】：
【学び合い】： } 学修の効率化

Team based Learning

図1 初年次教育科目「まなぶる➤ときわびと」の授業コンテンツの基本コンセプト

表1 「まなぶる➤ときわびとⅠ」のプログラム

週(2コマ)	テーマ	サブテーマ	内容
1～4	チームビルディング	他者理解による自己理解	チームビルディングワーク
5	ロジカル コミュニケーション	深く読む	リーディング
6～7		論理的に書く	ライティング
8		論理的に考える	ロジカルシンキング
9		多角的に考える	クリティカルシンキング
10		的確に読む・書く	テキストシンキング
11		図で考える・伝える	ビジュアルシンキング
12		“論理的に考える”“多角的に考える”を実践する	ディベート
13～14		効果的に表現する・伝える	プレゼンテーション
15	まとめとふり返し		

「ロジカルコミュニケーション」＝情報を正しく受け入れ、自らの考えを説得性(根拠)をもって共有・発信する力

療放射線・口腔保健・看護)混合、約5名のグループで学修を進める。学修は、チームビルディングという方法で、すべての授業をチームで協働して進めていく。チームビルディングは、自然発生的にできていくチームワークを待つのではなく、コミュニケーションやリーダーシップなどについて学びながら、自分をより深く理解し、チームメンバーとも相互理解を深め、目標を統合し、目標達成のために力を合わせていく、そんなプロセスを体験的に促進する教育・訓練の手法といわれている。対人援助職として求められるさまざまな「できる」の修得を目標としている。

本学の学生には将来、チーム学校、チーム医療の一員として、役割を担ってもらわねばならない。そのために「協働力」は必須の能力といえる。この科目を基礎として、来年度から開講予定である「IPW(Inter Professional Work)」や「チーム学校」について学ぶ科目につなげていくことを意図している。

「Ⅰ」においては、協働力とロジカルコミュニケーションの修得をねらいとし、「Ⅱ」においては、「Ⅰ」の学びを発展させて、計画的学修および学生相互による学び合い、教え合いに取り組む。

上述したことを図示するとこのようになる(図1)。この授業は「ふり返し」と「分かち合

表2 「まなぶる>ときわびと II」のプログラム

週 (2 コマ)	テーマ	内容
1～2	チームビルディング	チームビルディングワーク
3	教え合い・励まし合い ＝学び合い による〈計画的学修〉	・教材は SPI ・計4週にわたる学修計画表の作成とふり返り ・事前/事後学修が前提 ・毎週、2回のテスト(教え合い前後) ・わからない箇所はチーム内で教え合う
4		
5		
6		
7		
8	まとめとふり返り	

計画的学修＋学び合い＝学修の効率化

教材としての SPI＝数理リテラシー・リメディアル・就職へ向けて

い」を重視しており、「活動あって学びなし」にならないためにも個人としてのふり返し、チームとしての分かち合いに時間をかけるようにしている。

(2)「まなぶる>ときわびと I」について

「まなぶる>ときわびと I」のプログラム内容はこの通りである(表1)。ロジカルコミュニケーションを「情報を正しく受け入れ、自らの考えを説得性、根拠を持って共有、発信すること」と定義し、それを身につけることができるように、読み・書き・思考し、ディベートやプレゼンテーションを通じて一つの力ではなく、ジェネリックスキルの修得をねらいとしている。

(3)「まなぶる>ときわびと II」について

「まなぶる>ときわびと II」のプログラム内容を図示する(表2)。本学の学生は教員採用試験や国家試験に合格しないと専門職には就くことができない。その試験に合格するためには、自分の学びの特徴を学生自身が把握することが必要となる。この授業では SPI を教材とし、計画的学修と学び合い、教え合いに取り組む。教材は SPI にこだわったわけではないが、どこかの学科の学生の得意な分野に教育内容が偏らないように考慮した。近年、数理リテラシーの重要性がクローズアップされていることやリメディアル教育の新しい形になると考え、この教材を選択した。

(4)「まなぶる>ときわびと」の運営方法

この授業の特徴としては、ソクラテスらの教育方法を採用した点にあるといえる(光成他, 2018)。その教育方法は、相手に知識を教え込むのではなく、対話や問答をとおして相手の知識や考え方の誤りを意識させ、真理に導く方法であり、対話法や問答法といわれる。教化や注入ではなく、対話や問答をとおして、相手を真理に導く方法は、現在の教育方法にも示唆を与えている。このことを踏まえ、本科目では、教員はファシリテーターの役割を担い、学生同士あるいは学生と教員の対話や問答を通じて、問題解決を促す方法であり、方法・内容としては、学生が「思考する」能動的経験学習、AL (Active Learning) を主体とし、PBL (Problem Based Learning/Project Based Learning) ならびに TBL (Team Based Learning) 型授業方法である。デモンストレーション、グループ討論、発表などを中心とした学修方法が、学生の汎用的能力の定着にはより有効であると考え、PBL / TBL 型授業を実施している。

「まなぶる➤ときわびと」においては「I」「II」ともに多人数で担当する科目であり、約450名の新入生を30名の教職員が担当している。教職員は2人ペアで約30名の学生を担当することになる。昨年度は教員が27名、職員3名で担当した。専門および学科の異なる教員と職員が混合で担当することもこの授業の特徴の一つである。新任教員や教育歴の短い実務家教員と教育経験が長く、ファシリテーションの上手な教員をペアにするなどの工夫をしている。この授業は何かを教えるという授業ではない。それゆえ学生の主体性や積極性を引き出すような授業運営が求められ、ふり返りの時間に重きを置くことが求められる。授業における教職員の役割は、グループ間での話し合いやふり返りが活発になるようにファシリテーションを実施すること、学生が記述した個人のふり返しシートやレポートに対して、1週間以内にコメント返しをすることである。

毎回事前・事後学修を課すことで、学生は大学での学び方も体得する。担当教員には、毎回の課題、学生の回答に即時フィードバックしてもらうことを依頼している。時宜を得たコメント返しが、学生の学修意欲の喚起や学修習慣の確立にも影響を与えているからである。それゆえ1名の教職員が担当する学生数を15名程度に限定している。職員が担当することで、ボランティア活動や地域活動といった正課外の活動と正課の授業との結びつきを強める効果もある。多人数の教員で評価を行うので、評価の方法や基準にゆらぎが出ないようにループリック表を作成し、評価を行っている。レポート試験で総括評価を、LMS (manaba®) で実施するレポートで形成的評価を行い、ふり返しシートなどを評価する、ポートフォリオ評価も行っている。

学期前には担当者が集まり、授業の打ち合わせを行う。また、毎回の授業の実施前・後にそれぞれ30分間、計1時間の打ち合わせも実施する。そこで学生のみならず教員も授業のふり返し、授業内容・方法の確認を行う。対面の情報共有できる時間には限りがあるため、LMS (manaba®)、マイクロソフトのOneDrive®, メーリングリスト等の情報通信技術 (Information and Communication Technology, 以下 ICT) を活用し、出席状況、授業資料の準備、コメントの入力、ループリックを活用した成績をリアルタイムで編集可能とするなど、情報の共有・標準化を図っている。

(5) 本学における「まなぶる➤ときわびと」の存在意義

本科目は、実務家教員や教育歴の短い教員のファカルティデベロップメント (Faculty Development) として機能し、学科や専門を超越した教員間のつながりを生んでいるだけでなく、授業方法や成績評価のプロトタイプとなっておりと同時に、授業の実施、評価、検証、改善というPDCAサイクルを具現化するための、いわゆる本学における実験的科目の役割を担っている。この科目で実施している教員アンケート結果からは「教員間の情報共有」について、概ね好評な意見が出ており、全学共通授業の実施、初年次教育のデータを蓄積・管理することで、専門の異なる教員同士の共同研究に発展したり、これまで教育研究に取り組んだことがなかった教員が教育研究に関する学会で発表をするなど、教育分野のみならず、研究分野にも良い効果が生じている。

3. コロナ禍における「まなぶる➤ときわびと」の運営

本授業は、対人援助職養成のカリキュラムであっても対面での授業実施が難しかった2020年に、前期開講の「I」についてのみ対面と遠隔のハイブリッドで実施したが、ICTの

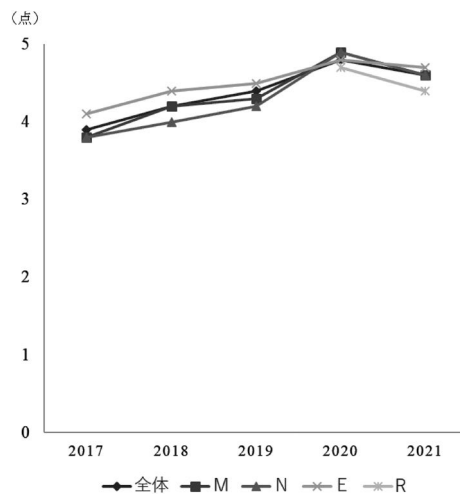


図2 「まなぶる>ときわびと I」の授業評価

活用により、特段大きな問題は生じなかっただけでなく、この年の大学が実施している授業評価の結果が従来以上に高い値を示した(図2)。

この結果に関して、遠隔実施の授業が大半を占める2020年度前期において、入学直後の学生にとって、数少ない対面でしかもチームビルディングの形式で授業を実施したことが、初年次学生の心理的安定や自己肯定感につながったのではないかと考えている。初年次教育の役割の一つである、学生の居場所感の確立が非常に重要であると再確認できた。

4. ウィズコロナ・ポストコロナにおける初年次教育

われわれはコロナ禍を経て、対面授業・遠隔授業、それぞれの長所・短所について知ることとなった。対人援助専門職を育成する本学の特性上、対面授業が主となるが、ウィズコロナ・ポストコロナ時代にあっては、初年次教育のみならず対面・遠隔のそれぞれの長所を活かしたハイブリッドな授業展開が求められると考える。

遠隔授業のメリットとしては、学生が自分のペースで学修できる、何度でも同じ授業を閲覧することができる、時間や場所を選ばず学修できるなどが挙げられる。また環境設定をうまく行えば、教員が受講者全員あるいは個人に対して、質問への回答や課題のフィードバックを即時・適宜行え、対面授業に比して、学生が質問を行いやすい環境を作ることでもできる。また遠隔授業の推進は、授業外学修、事前・事後学修の促進、通常化につながったともいえる。その一方で、課題が増加し、学生の授業外学修時間が増加し、これまで個々の教員に委ねられていた課題の提示や総量についても、大学が組織として把握しなければならないという状況も生まれた。

最後に、ウィズコロナ・ポストコロナの時代にあって、初年次教育をどのように進めていくかについて考える。本学は本授業において、LMSの早期活用など、これまで数多くのデジタルデータを集積してきた。全学生が受講するこの授業を「データ収集のプラットフォーム」として活用しない手はない。教育のデジタル・トランスフォーメーション(Digital Transformation)化へ向けた取り組みを推進していく一助として本授業を活用していくこと、本授業と入学前教育プログラムの連携の強化も考えている。昨年度より、これまで対面で実施してきた入学前教育を遠隔で実施することとなった。入学への不安解消や

学びに対するモチベーションの維持・向上を図ることを本プログラムの主目的としており、入学前に体験するチームビルディングの手法を、入学後の「まなぶる➤ときわびと」と共通のフォーマットとすることで、初年次教育への導入という位置づけを明確化させることができた。さらに、本プログラムには「まなぶる➤ときわびと」を経験した上級生がSA(Student Assistant)として参加し、入学予定者のサポートにあたっている。上級生のSAにとって本プログラムは、「まなぶる➤ときわびと」で身につけたチームビルディングの手法を「ファシリテーター」という立場に置き換えて実践できる、リーダーシップを体験的に学ぶ場ともなっている。このように「まなぶる➤ときわびと」から入学前教育への接続も学生の学修成果を図る機会となっている。本授業と他の基盤教育科目との有機的連携についても考えており、2022年度現在、専任教員103名中63名の教員と職員3名が基盤教育に携わっている。これだけの教育的リソースをチームティーチングで最大限にいかし、科目間連携を通して初年次教育としてのねらいを明確化することで、本学の初年次教育は時勢に先んじた展開をみることができると考えている。すでに今年度より「情報基礎」「情報メディア演習」において、運営方法や授業コンテンツについての連携へ向けた改善に着手している。本科目の授業内容は、現在文科省が推し進める「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」の認定要件の一角をなすものであり、この連携により、互いの授業で学んだ内容を双方の授業にフィードバック(応用・展開)しつつ、相乗的に学んでいくという効果を期待している。

以上が本学の初年次教育科目の実践報告となる。ウイズコロナ、ポストコロナの時代にあって、本科目と入学前教育、他の初年次教育科目との有機的連携を強めていくことで、さらなる初年次教育全体の充実を図っていきたいと考えている。

参考文献

- 桐村豪文・光成研一郎・國崎大恩・牛頭哲宏・高松邦彦・伴仲謙欣・中田康夫(2018a)「初年次教育科目『まなぶる➤ときわびとⅠ』で何を得たか—学生が捉える学修の〈意味〉—」『神戸常盤大学紀要』, 11, 193-208.
- 桐村豪文・高松邦彦・伴仲謙欣・野田育宏・光成研一郎・中田康夫(2018b)「基盤教育の設計—教職協働による教学マネジメント改革の成果—」『神戸常盤大学紀要』, 11, 181-192.
- 光成研一郎・桐村豪文・國崎大恩・牛頭哲宏・高松邦彦・伴仲謙欣・中田康夫(2018)「教育から学習へ：教育のパラダイム転換—『まなぶる➤ときわびとⅠ』の実践から—」『神戸常盤大学紀要』, 11, 7-16.
- 文部科学省(2020)「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について」https://www.mext.go.jp/content/202000513-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf(2022年12月1日閲覧).
- 大森雅人・溝越祐志・高松邦彦・野田育宏・伴仲謙欣・中田康夫(2021)「コロナ禍における私立中規模大学での遠隔授業の実践—2020年度前期(4月～9月)—」『神戸常盤大学紀要』, 14, 87-94.
- 高松邦彦・野田育宏・溝越祐二・伴仲謙欣・中田康夫・大森雅人(2021)「専門職免許取得に特化した私立中規模大学におけるコロナ禍での遠隔授業」『学習分析学』, 4, 28-37.